様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３８００２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2020
課題番号：１６Ｋ０４４１３

研究課題名（和文）沖縄戦体験者のニーズに即した「見える物語綴り法」の開発と高齢者心理臨床への応用

研究課題名（英文）Development of the "Visible Storytelling Method" to Meet the Needs of Okinawa War Survivors and Its Application to Psychological Clinics for the Elderly

研究代表者
吉川　麻衣子（MAIKO, Yoshikawa）

沖縄大学・人文学部・教授

研究者番号：８０６１２７９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：沖縄戦の終焉から75年が経過してもなお，心奥に苦悩を抱える人びとがいる。彼らの中には人生の想い出（体験や感懐）を見える形で遺すことを望む人びとがいた。彼らのニーズから生まれた「見える物語綴り法」は，語りの内容からイメージされる視覚媒体（映像，写真，絵，パンフレットなど）を語りと併用する方法である。
高齢者福祉施設においても，視覚媒体を介在させると人びとの語りが深まり，対話が促進され，心理的な安定がもたらされた。個々のペースで軌跡を辿り，見える形で人生を語り遺そうとする本実践は，高齢者心理臨床での適用が可能だと考えられる。ただし，効率化が求められる現場での適用には更なる方法論の検討が必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
20余年，沖縄戦体験者との研究を続けてきた。最期に遺したいことは何か。その問いへの考え方は多様である。「見える物語綴り法」で重視されるのは，語り手個々のニーズとペースである。そのため，標準化は難しい方法だと思われる。しかし，語り手が求める視覚媒体を共に探し考える対話のプロセスは，人生の統合作業そのものであった。昨今，他の研究分野やメディアにおいて戦争体験者への聴き取りが盛んになっている。研究者主導の「いつ，どこで，何が」と正確な事実を追究する調査ではなく，自発的な語りを尊重して体験と感懐を丁寧に聴き受ける本実践の知見が活かされることを期待している。

研究成果の概要（英文）：75 years have passed since the end of the Battle of Okinawa, but there are still people in Okinawa who carry anguish deep in their hearts. Some of them wished to leave their life memories (experiences and feelings) in a visible form. This practice was triggered by their needs in 2015. In this approach, visual media (video, photos, pictures, pamphlets, etc.) that are imagined from the narrative content are used in conjunction with the narrative. In welfare facilities for the elderly, the use of visual media deepened people's narratives, promoted dialogue, and brought psychological stability. People who are tormented by the memories of the war have made it their last task to trace their own trajectory at the end of their lives and leave their stories in a visible form. It was suggested that this practice could be applied to the clinical psychology of the elderly. However, further methodological studies are needed for application in the field where efficiency is required.

研究分野：臨床心理学

キーワード：見える物語綴り法　戦争体験　沖縄戦　共創　ナラティヴ　物語　高齢者　地域心理臨床

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

1997 年から継続している沖縄戦体験者との研究・臨床活動の変遷が研究開始当初の背景にある。

（1）1966 年に実施された沖縄県の精神衛生調査において，戦争をきっかけに精神疾患に罹患した者の割合は，本土平均の 2 倍以上と示唆された。筆者が行った調査では，「戦争中のことは思い出せない」「音や光などの特定の刺激に敏感」「戦争体験を思い出して眠れなくなる」などの項目で全体 437 名のうち約 3 割であった。同調査にて「戦時中の悪夢を見る」は全体の約 6 割で，関東近郊での調査と比して約 6 倍高かった。60 余年経過してもなお心理的影響は深く残存していた（吉川・田中，2004；吉川，2004）。

（2）調査を通して，安心して戦争体験を語り合いたいという人びとのニーズが明らかになった。2005 年より沖縄県内 7 地域で「戦争体験を語り合える場」（以下，語らう会）を開催するようになり，参加者，家族，地域の視点から実践を評価した（吉川，2015a）。
【参加者】個々の参加者の意思とペースを尊重し，安心して戦争体験を語ることができてよかった。長年語れなかった想いについて戦世を生きた者同士で語らうことができた。
【家族】語らう会に参加するようになって母親の表情がよくなった。重荷が少し楽になったようで祖父が安心して眠れるようになったという。体験を家族に語るようになった。父親の歴史を知ることができた。
【地域】孤立しがちで支援の手を差し伸べづらかった高齢者を理解する機会になった。特に独り暮らしの方には日常的な居場所として大切な交流の場になっていたようだ。

（3）しかし年々逝去される方が増え，語らいに参加する人数が減ってきた。「見える形で自分史をまとめたい。自分の体験と想いを後世に残したい」という参加者のあらたなニーズを確認した（吉川，2015b）。そこで，人生の最期に向かう沖縄戦体験者との「見える物語綴り法」の共創に関する探索的研究を始めた。研究参加者 20 名（平成 25 年当時平均 86.5 歳，女性 13 名，男性 7 名）。沖縄戦当時，兵士，学徒動員，地上戦を逃げ惑う体験した者であった。

個々の自発的な語りとその中でイメージされる視覚媒体（写真や映像，絵など）をもとに対話を続ける。視覚媒体は聴き手である筆者が準備し，次に対面する機会に持参する。「今ここ」で生成される語り手のことば，あるいは語り直されながら紡がれる物語を補完するものとして，視覚媒体を用いている。語り手と聴き手の相互作用から生成される「語りを可視化した自分史（物語綴り）」の創作は，高齢になった戦争体験者の心理的支援の手立ての 1 つとなりうる可能性が示唆された（吉川，2015b）。【科研費課題番号：25780437（平成 25～27 年度）】

２．研究の目的

本研究は，上記の研究を発展されたものであり，主な目的は次の 3 点である。

（1）実践例の蓄積の必要性：新しい方法論として提示するためには，実践例をさらに蓄積する必要がある。ただし，個々のニーズに沿って展開していく実践であるため，期間内に実施できる事例数には限界があり，新規で 10 事例程度と考える。

（2）「可視化することによる心理的効用」の検討：可視化することで語りが深まる実感が語り手と聴き手双方にあるが，実証は未だできていない。可視化の有無，対話の有無などの状況設定による個人内比較を行い，可視化の効果を検討する。他の方法論との比較検討も行い，理論的裏付けを行いたい。

（3）高齢者福祉施設の軽度認知症高齢者への実践の試み：沖縄県の高齢者福祉施設従事者への調査の結果，「沖縄戦のことを語る利用者は多いが，職務で関わりながら，その語りを大切に扱うことは時間的にも心情的にも難しい」と戸惑いを感じている従事者が，特に若い世代に多い現状が明らかになった（吉川，2015c）。沖縄戦体験者の多くが高齢者福祉施設に入所していることを鑑み，臨床現場での実践を通して汎用性を検討する必要がある。現場の実態も理解しながら，臨床現場で「使える」方法として工夫・開発を進めていく。

３．研究の方法

上記の研究目的を遂行するため，研究期間内に 4 つのサブテーマに取り組んだ。

（1）これまでの「見える物語綴り法」の実践例の再分析　＜サブテーマ 1＞
語りの変容プロセスに「見える物語綴り法」がどのような影響を及ぼしたかを検討する。逐語録を示しながら語り手に回顧を促し，「可視化すること」が語りにもたらす影響をインタビュー調査する。実践方法の改善点も整理する。平成 27 年度までに実践を終えた 20 事例のうち，存命の 10 事例について再分析する。

（2）「語らう会」参加者の新規 12 事例の実践　＜サブテーマ 2＞
サブテーマ 1 で明らかになった改善点に留意した上で，「語らう会」参加者で実施を希望する新規 12 名のニーズに即して実践を行う。

（3）「見える物語綴り法」の理論的な検討　＜サブテーマ 3＞
平成 27 年度までに，参加者と参加者家族を対象とした数量的な効果検討と事後面接による検討を行ったが，本実践は「はじめに当事者のニーズありき」の発想から生まれたものであるため，理論的な裏付けが弱い。既存の概念・手法も参考に理論的な説明を試みる。

（4）高齢者福祉施設における実践　＜サブテーマ 4＞
研究参加者（入所高齢者）・施設との関係構築の期間を経て，施設で実施する際の留意点を整理する。地域在住高齢者とは異なる側面（施設という環境，認知症の程度など）で留意点が挙がってくることが想定され，軽度の認知症高齢者 10 名程度の実践を予定する。話（言語）だけでは記憶の想起が難しい方でも，写真や映像が補助的にあれば生き生きとした表情で話ができる方は多い。ただし，想起や再体験による心理的影響にも十分配慮する。個々の状態・ペースに即して，主治医や担当職員，家族などとも相談しながら進めていく。評価は，自己と他者の両面から行う。最終的には現場で活用できる支援法として施設従事者や家族が聴き手となって実施できるよう研修等を行う。

４．研究成果

（1）「見える物語綴り法」の実践例の蓄積（終結事例の再分析と新規事例）
平成 27 年度までに実践を終えた 20 事例のうち，存命の 10 事例の実践過程を見直した。本実践は，1 事例につき 2，3 週間に 1 回のペースで実施し，計 18～35 回を要した。新規 12 事例のうち 4 事例は途中で逝去されたため，8 事例に「見える物語綴り法」を実践し，平成 29 年度下旬に終結した。研究参加者の実践途中での逝去は，研究計画時において予想されていたことだが，非常に心残りである。実践を通して作成された自分史は，各人が望む形でまとめられた（棺に納める，家族に遺すなど）。自分史は紙ベースで平均約 1,500 頁，映像データ約 50 時間超になるものもあった。この成果の一部は吉川（2020）において公開した。
令和元年度には，日系アメリカ人（2 世）1 事例に実践した。文化的な差異や戦後置かれた社会的立場も踏まえて，その成果は研究期間終了後にまとめる。

（2）「見える物語綴り法」の理論的な検討
終結事例 10 名に，「可視化すること」が語りにどのような影響を及ぼすのかについてインタビュー調査を実施した。可視化より，語りを深め体験過程が深化することが明らかになった。また，「オープンダイアローグ」の枠組みでの考察が可能であること明らかになった。しかしながら，理論的な裏付けを含めた論文化が未だできていないため，今後の課題とする。

（3）高齢者福祉施設における実践
沖縄県内の高齢者福祉施設 3 カ所において 7 事例の実践を行った。当初，施設入所者 10 名に実践を行う予定であったが，認知症が進行したり逝去されたりしたため，2 名は実践を開始することができず，残り 1 名は余命僅かという状況で 4 ヶ月間「見える物語綴り法」の実践を行ったが，終結を迎える前に逝去された。さらに，実践を行っていた 7 名中 2 名が令和元年度に逝去したため，新たに 2 事例の実践 が 10 月より始まった。認知症の進行や逝去による研究への影響は想定されていた課題であったが，令和 2 年度に研究期間を延長した。

しかしながら，新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により，令和 2 年度は高齢者福祉施設での実践継続は困難と判断した。ただし，終結には至らなかった事例についても，施設従事者や家族からのフィードバックを通して本実践の意義を考察していくことにした。COVID-19 の終息を待ち，研究期間終了後も家族等にオンラインでインタビュー調査を実施予定である。現時点で明らかになったのは，高齢者福祉施設等で実践する際には 20 回程度で終結できるような方法上の工夫が必要な点である。本実践は，研究参加者のニーズとペースを重視しているため，短時間ですぐに効果が出る簡便な手法ではないが，業務内で「使える」方法の開発に向けて今後更に検討を続けていく。

（4）研究成果の書籍化
平成 29 年度には，平成 11 年から継続してきた沖縄戦体験者との一連の研究成果をまとめ，

6 月 23 日に書籍『沖縄戦を生きぬいた人びと―揺れる想いを語り合えるまでの 70 年』を出版した。当初の計画よりも製作費を要することとなり，平成 28 年度の直接経費の約半額を繰り越して支出した。本研究課題サブテーマ 1 に関わった 20 事例と，サブテーマ 2 に関わった 12 事例は，書籍の主な内容である「語らう会」に参加していた人びとである。沖縄戦を生きぬいた者同士の語らいを通して培った精神的な安心感を基盤として，本研究課題の「見える物語綴り法」の実践が展開された。

（5）オンラインでの実践の試み

COVID-19 の影響を受けて，感染・重症化のリスクが高いとされる高齢者と対面して研究を継続することは大変困難になり，研究を一時休止した。このような状況下で研究を継続するためにどのような工夫が講じられるかを考え，オンラインを活用した「見える物語綴り法」の実践を試みた。

2 名の参加者にタブレットとモバイル Wi-Fi を貸与し，家族の協力を得ながら画面越しに対話，視覚媒体を共有した。慣れない方法であったため，準備に多くの時間を要し，対面で実施していた時よりも自発的な語りが幾分少なくなったが，2 名の参加者がそれぞれ満足のいく形で実践の終結を迎えることができた。オンラインに馴染みにくいと考えられていた高齢世代でも，工夫次第で研究実践は可能なのかもしれない。今後もオンラインでの実践が継続されるかは未定であるが，オンラインでの試みは吉川（2021）において成果の一部を公開する。

＜引用文献＞

吉川麻衣子・田中寛二（2004）沖縄県の高齢者を対象とした戦争体験の回想に関する基礎的研究 心理学研究，75（3），269-274.

吉川麻衣子（2004）戦争体験からの回復過程に影響を及ぼす要因に関する探索的研究：沖縄県高齢者の生活史調査と調査研究を通して　明治安田こころの健康財団研究助成論文集，39，131-140.

吉川麻衣子（2015a）臨床研究における方法論をめぐって：「共創」という視点　井出智博・吉川麻衣子（編）心理臨床の学び方：鉱脈を探す，体験を深める　創元社，43-63.

吉川麻衣子（2015b）自発的なナラティブを活かす「見える物語綴り法」の開発：終末期の沖縄戦体験者の抑うつ度と語りの変容を中心に　日本心理臨床学会第 34 回秋季大会発表論文集，594.

吉川麻衣子（2015c）高齢者福祉施設における沖縄戦体験の語りの実態調査：語りに対する施設従事者の対応と想いを中心に　沖縄大学人文学部紀要，17，77-83.

吉川麻衣子（2017）沖縄戦を生きぬいた人びと：揺れる想いを語り合えるまでの 70 年，創元社.

吉川麻衣子（2020）紡がれる記憶：沖縄戦体験者と「見える物語綴り法」　臨床心理学，増刊第 12 号，137-143.

吉川麻衣子（2021）オンライン高齢者サポート・グループの可能性：「沖縄戦を体験した人びとの語らいの場」のプロセスをもとに，人間性心理学研究，39（1）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 吉川　麻衣子	４．巻 18(5)
２．論文標題 沖縄戦の語りとその後	５．発行年 2018年
３．雑誌名 臨床心理学	６．最初と最後の頁 625
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉川　麻衣子	４．巻 3
２．論文標題 沖縄戦体験者の語り	５．発行年 2016年
３．雑誌名 臨床ナラティヴアプローチ：協働報告	６．最初と最後の頁 13-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉川　麻衣子	４．巻 12
２．論文標題 紡がれる記憶：沖縄戦体験者と「見える物語綴り法」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 臨床心理学	６．最初と最後の頁 137-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉川　麻衣子	４．巻 39(1)
２．論文標題 オンライン高齢者サポート・グループの可能性：「沖縄戦を体験した人びとの語らいの場」のプロセスをもとに	５．発行年 2021年
３．雑誌名 人間性心理学研究	６．最初と最後の頁 ―
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　1件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 吉川　麻衣子
２．発表標題 レジリエンスを高めるーコミュニティウェルネス・トレーニングマニュアルの日本での展開と課題
３．学会等名 日本心理臨床学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Maiko Yoshikawa
２．発表標題 What Does War Mean to the Okinawan Survivors of the Second World War?：A 20-year Longitudinal Study
３．学会等名 International Congress of Psychology（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 吉川　麻衣子
２．発表標題 沖縄戦を生きぬいた人びとと私
３．学会等名 日本福祉心理学会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 吉川　麻衣子
２．発表標題 グループ実践について世代を超えて語り合う
３．学会等名 日本人間性心理学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 吉川　麻衣子
２．発表標題 沖縄戦を生きぬいた人びと
３．学会等名 サポートグループセミナー
４．発表年 2017年

１．発表者名 Maiko YOSHIKAWA
２．発表標題 The Psychological Impact and Posttraumatic Growth of Okinawan Survivors of the Second World War: A 15-year Longitudinal Study.
３．学会等名 Person-Centered and Experiential Psychotherapy and Counseling（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 吉川　麻衣子
２．発表標題 「戦争体験を糧に生きる」ということ：沖縄での15年の縦断的調査を通して
３．学会等名 日本人間性心理学会
４．発表年 2016年

〔図書〕　計1件

１．著者名 吉川 麻衣子	４．発行年 2017年
２．出版社 創元社	５．総ページ数 192
３．書名 沖縄戦を生きぬいた人びと―揺れる想いを語り合えるまでの70年―	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関